

大学生の青少年期における 自然体験活動への参加傾向 (第1報)

山口太郎・中川理絵・齊藤ゆか

要旨

本稿は、大学生の青少年期における自然体験活動への参加傾向の実態と課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、K大学「体験型研修（自然の分野）」受講者等を対象に調査分析を行った。

得られた結果として、自然体験は学校教育内外を問わず小学生期が最も多く、中高生期にかけて減少する傾向が確認された。体験内容としては、遊びや五感体験、ハイキングなど身近な活動への参加の割合が高く、学校教育内では栽培や美化活動、学校教育外では自然遊びや地域行事の参加が多かった。高校で文化部に所属していた学生は、中高生時の学校教育外での自然体験が相対的に多い傾向を示した。「みどりの鎌倉」では五感体験、「食育わくわく体験」では食や農に関する体験など、屋外中心のプログラムは過去の自然体験項目と対応していた。一方で、屋内中心の「ケーキ屋・パン屋になろう」履修者は、他の二つのプログラムに比べて過去の自然体験がやや少なかった。社会性の調査では「失敗への不安」はあるものの、「達成動機」「努力主義」「他者協力」の積極性が確認され、これらの特徴を踏まえてプログラム構成上のアプローチが検討可能であることが示唆された。

キーワード：大学生，青少年，自然体験活動，参加

1. はじめに

「体験活動」は「意図的かどうかを問わず、直接自然や人・社会等とかがわる活動を行うことにより、五感を通じて何かを感じ、学ぶ取組」をいう（文部科学省 2013）。「体験活動」には、「生活・文化体験活動」「自然体験活動」「社会体験活動」の三分類がある。このうち「自然体験活動」は「自然の中で、自然を活用して行われる活動」である。具体的には、「野外活動（キャンプ、ハイキング、スキー、カヌー）」「自然・環境学習活動（動植物や星の観察）」「文化芸術活動を含む総合的な活動（自然物を使った工作や自然の中での音楽会など）」がある（日本野外教育学会 2022）。これに加えて、農業・漁業・林業など第一次産業の体験活動も含まれる。自然体験活動の有用性については、「子どもの多面的な発達を促し、教育効果が高い」ことは自明であり、多くの論者によって実践・研究がされてきた。

この自然体験の重要性への言及は 17 世紀「自然に関わる西洋の教育思想」にまで遡る。「Comenius に始まり、Rousseau によって基礎づけられ、Pestalozzi や Frobel によって展開」された（高橋・高橋 2007）。例えば、「直観」や「感覚」を高める訓練として「自然と触れ合う」こと、「内面の成長を促すこと」、「自然に親しみ自然が持つ『雄大さ・美しさ・喜び』や『畏敬の念』を感じ取る感性教育」の重要性が唱えられ、実践が受け継がれてきた。18 世紀には「人間性を育む概念」も加わり、西洋思想は米国や日本の教育に影響を与えた。このように 17 世紀に Comenius 『大教授学』（1657 年、同書訳コメニウス（1962））で知識注入の教育を批判し、「自然が持つ教育的見解」を論じた以降、時代の変化と

共にその意義は変遷してきた。

自然に関わる国際動向に目を転じると、2010年の生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）で、日本が提案したSATOYAMAイニシアティブにより世界的取組が進められた。2024年11月には、生物多様性保全条約第16回締結国会議で、「自然と調和する社会へ」にむけた地域主導のランドスケープアプローチが議論された。ランドスケープアプローチとは、「一定の地域や空間において、（土地・空間計画をベースに）多様な人間活動と自然環境を総合的に取扱い、課題解決を導き出す手法」である。ネイチャーポジティブは、国連環境総会（UNEA）の自然環境保全のための包括的な行動の枠組みなど、世界全体を巻き込んだ大きな社会変革の道筋となっている。「人と自然の関係を再構築する大胆な枠組み」が国際的に提起されたのである（環境省2023）。

一方、日本では、「里地・里山・里海」のように、人間の社会経済活動が地域の自然環境に根ざす「社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ（SEPLS：Socio-Ecological Production Landscapes and Seascapes）」として知られる地域は、農業、漁業、林業などの第一次産業に加え、観光など様々な社会経済的利用価値・形態を含んでいる（環境省 自然環境局 HP）。しかし、この議論には、未来を担う子どもや若者に向けた、自然に関わる教育的観点は含まれていない点に注意する必要がある。それゆえ、「持続可能な管理の推進と自然・文化遺産や資源を守りつつ、活用していく」ためには、ローカルなコミュニティレベルにおいても具体的な課題解決に向けた行動とそれを促進する実学教育が不可欠である、と筆者らは強調したい。特に「生物多様性の負（損失）の流れを止めて正（回復）に反転させる」ネイチャーポジティブな地域社会に向けて、統合的・包摂的で地域に根差したSEPLS実践が希求される（国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS））。これらは、持続可能な開発目標（SDGs）の「14（水中の生命）」と「15（陸上の生命）」を含む複数のSDGs達成に貢献するものである。

そこで本稿では、大学生の青少年期における自然体験活動への参加傾向の実態と課題を明らかにすることを目的とする。研究方法は、主に調査研究とする。まず青少年期の自然体験活動に関する独自調査の設計に向けた既存調査研究を収集する。次に、K大学「体験型研修」の導入と実態把握を行った上で、その受講学生等を対象とした調査分析を行う。

2. 調査方法

(1) 調査目的と調査設計

調査目的は、大学生の青少年期の自然体験の有無や傾向を明らかにすることである。

独自調査の項目は、次の調査研究に基づく。国立青少年教育振興機構（2024）のほか、大学のカリキュラムにおいて自然体験を取り入れ、その活動内容や学習効果を分析している松重・上月・山中（2017）、渡部（2018）、二宮・今井（2018）、川畑・福満（2019）、奇二・嘉瀬・濁川（2019）、林・岡田（2020）、松井（2020）、上野・安藤・長谷川（2021）、常木・田口・菅沼・高井（2022）を参照し作成した。

(2) 調査概要

調査対象者：K大学の共通教養科目で実施している「体験型研修（自然の分野）」の履修生と初年次教育「FYS」の履修生を対象とした。FYS履修生と「ケーキ屋・パン屋になろう」履修生を調査対象とする理由は、自然体験豊富な学生が「体験型研修（自然の分野）」、特に学外での活動を含むプログラムを履修候補にあげやすく、そうでない学生は候補にあげにくいといった仮説を検証するためである。

調査内容と項目：基本属性に加え、「自然体験に関すること」「社会性に関すること」である。自然体験に関する調査項目は、主に実施される場所に基づいて5つに分類される30項目である。5つの分類

は、自宅やその周辺、自然環境、自然環境（レジャー）、地域社会、環境学習・意識とした。30項目の体験の時期について、学校教育内（小学校、中学校、高校）と、家庭を含む学校教育外（小学時、中学時、高校時、大学時）の2つに分けて回答を求めた。社会性に関する調査項目は、8つに分類される22項目である。8つの分類は、行動の積極性、失敗に対する不安、能力の社会的位置付け、達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者協力、環境への意識に関することである。これらの適性について、4段階評価の回答を求めた。

調査方法（方法・期間・倫理的配慮）：集団一斉法による質問紙調査を無記名制で実施した。前期最終回（2025年7月）および後期初回（同年9月）の授業後に実施した。研究倫理的配慮として、回答にあたって当該科目の成績には一切関係しないことや、個人情報守秘義務などについて十分な説明を行った。そのうえでアンケート記入の同意が得られた学生を対象とした。

分析方法：第一に「体験型研修」を履修する学生と履修していない学生との差異、第二に、「体験型研修（自然の分野）」プログラム間での差異、についての分析を行う。プログラムごとに、自然体験については各調査項目の時期別体験数の割合を単純集計したもの、社会性については各項目の評価の平均点を中心に分析を行う。本稿では、回答数が「多い」と判断する基準は「6割以上」（図表は太字部分）とした。

3. 共通教養科目「体験型研修」（自然の分野）の導入と実態

スマートフォンやタブレットが普及するにつれ、近年さまざまな分野でこれらを活用した「擬似体験」や「間接体験」が可能となってきた。コロナ禍を機にこの状況は一気に加速し、青少年期の直接的な体験の場が失われつつある。こうした現況の中で、教育的見地から大学生に「直接体験の場」を提供する重要性を鑑みて、K大学では2023年度より「体験型研修」という科目を新規に導入した。主たる狙いは、「実際に現地に足を運び、実物を見ること」「人と直接会うこと、関わり合うこと」「未知の経験をしてみること」を通して、一人ひとりの好奇心を引き出し、人間的成長と実践的能力を育むことである（同大学HP）。

「体験型研修」を導入した初年度の2023年度は21コマ開講し、プログラムの種類（内容）は14種類であった。延べ授業履修者が408名で、全学生数（学部）の2.2%が受講した。2024年度は全22コマ、プログラム種類は15種類、延べ授業履修者が448名で、全学生数（学部）の2.4%が受講した。2025年度は全21コマ、17プログラムとなっている。2025年度入学者より、1科目から3科目へ履修可能科目を増やし、学生にとってより多くの体験的な機会の提供を図ることとした。17プログラムは「体験型研修（自然の分野）」「体験型研修（人間形成の分野）」「体験型研修（スポーツ）」へ、その科目の専門性により振り分けた。

2025年度「体験型研修（自然の分野）」は、野外体験を取り入れたプログラム、化学実験を取り入れたプログラムなど多岐にわたる。この「体験型研修（自然の分野）」はSDGs目標4「質の高い教育をみんなに」、特にターゲット4.7「すべての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」に関わる。特に本稿で取り上げる「みどりの鎌倉」「食育わくわく体験」は学外の実習を通して、地域などの課題に気づかせ、学生自らそれらの解決策を模索する機会提供を行う。これにより目標11「住み続けられるまちづくりを」における地域経済の活性化にも貢献するものである。

尚、「食育わくわく体験」については、中川・齊藤（2025）が食育体験プログラム開発に向けた経過及び現状分析を既に行った。

4. 結果

(1) 授業目的と調査項目と関連

調査対象とした授業は、K大学「体験型研修」のうち「みどりの鎌倉」「食育わくわく体験」「ケーキ屋・パン屋になろう」の3プログラムである。ここでは、前提となる授業目的と調査項目との関連を示しておきたい。

まず「みどりの鎌倉」の授業目的は次の2点である。①鎌倉の自然環境の観察・体感から里山の利用について学習することで、自然と人間の関わり合いを理解できるようになること。②谷戸地形の保全のためのボランティア活動に参加することで、地域社会との関わりを自覚し、実感すること。その目的達成のために、鎌倉での2回の自然体験学習と事前・事後の学内での講義・実習を実施した。本プログラムは、調査項目のうち森林や里山に関する項目との関連が深い（表1の調査項目3, 6, 9, 12, 14, 15, 16, 17, 19, 25, 26, 27, 28）。

次に「食育わくわく体験」の授業目的は、次の3点である。①生物学や生物の生きるしくみに興味をもつこと、②地域課題、農業の課題に気づくこと、③課題解決のために何ができるのかを考えることができるようになることとした。これらの目標達成のために、小田原市で3回の農業・漁業に関する実習と事前・事後の学内での講義を実施した。本プログラムは、調査項目のうち農業や調理との関連が深い（表1の調査項目1, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 22, 24, 27, 28）。

さらに「ケーキ屋・パン屋になろう」は上記2プログラムとは少々趣の異なる科目である。全14回の授業は学内で実施し、文系・理系の教員6名と2名のゲストスピーカーによるオムニバス授業である。ケーキ・パンに共通した小麦粉に関する実験、パンを焼くときに必須の酵母に関する実験をはじめ、ケーキ屋・パン屋の店作りや商品展開に関するマーケティングの授業、実際にパン屋を経営している方による講演を通して、多角的な物の見方、考え方を身につけてもらうことを目的としている。本プログラムは、調査項目のうち調理や食材、販売との関連が深い（表1の調査項目1, 3, 4, 5, 6, 12, 15, 17, 23, 24, 25, 29, 30）。

(2) 調査対象者の主たる傾向

まず、調査対象者の概要についてである。調査対象者は全体で76名であり、無効が1回答あったため、回答者は75名となった（社会性に関する項目について無回答が1枚あり、この項目以外では分析に用いた）。そのうち、体験型研修の3プログラムの回答者は50名であり、1年生42名、他学年は8名であった。学部別では文系学部が46名、理系学部は4名であった。FYSの回答者は25名であり、すべて1年生、文系1学部である。調査対象76名の高校時の活動についてのアンケート結果から、運動部が36名（48.0%）、文化部が16名（21.3%）、生徒会・文化祭実行委員等経験者は16名（21.3%）であった。

次に、調査全体の結果についてである。表1は、学校教育内外における発達時期別自然体験項目ごとの体験人数とその割合を示したものである。学校教育内外ともに小学生での体験率が高い傾向にある。回答数6割以上に注目すると、両者に共通して遊びに関する項目（6, 7, 8）や五感に関する項目（15, 16, 17）、ハイキング（19）の割合が高い。身近な場所や遠足等で体験できる項目が高いといえる。また、学校教育内では学内でできる採集・栽培・飼育に関する項目（2, 3, 4）と地域社会の美化活動（25）の割合が高い。学校教育外では自然環境での遊びに関する項目（10, 13, 14）やレジャーでの動物とのふれあい（22）、地域社会の祭りへの参加（23）の割合が高い。中高にかけて体験率は下がる傾向にあり、学校教育内と比べて学校教育外の方が低下率は緩やかな傾向にある。また、絵画や撮影（12）、購

表1 学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数とその割合

No.	分類	調査項目	学校教育内						学校教育外							
			小学校		中学校		高校		小学時		中学時		高校時		大学時	
			n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%
1	自宅やその周辺	ナイフや包丁で果物を切ったり、皮をむいたことがありますか。	58	77.3	55	73.3	45	60.0	59	78.7	62	82.7	59	78.7	45	60.0
2	自宅やその周辺	ペットなどの生き物の世話をしたことがありますか。	53	70.7	8	10.7	4	5.3	44	58.7	29	38.7	24	32.0	20	26.7
3	自宅やその周辺	花を育てたことはありますか。	72	96.0	16	21.3	4	5.3	38	50.7	17	22.7	10	13.3	6	8.0
4	自宅やその周辺	米や野菜を植えたり育てたりしたことがありますか。	65	86.7	16	21.3	3	4.0	34	45.3	12	16.0	8	10.7	5	6.7
5	自宅やその周辺	干物・燻製・ジャムづくりなどの食品加工をしたことがありますか。	14	18.7	7	9.3	2	2.7	14	18.7	9	12.0	9	12.0	6	8.0
6	自宅やその周辺	自然物（種や実・枝・石など）を使って遊んだことがありますか。	66	88.0	21	28.0	5	6.7	64	85.3	22	29.3	9	12.0	5	6.7
7	自宅やその周辺	缶蹴りや、屋外でのかくれんぼをしたことがありますか。	60	80.0	17	22.7	5	6.7	69	92.0	26	34.7	5	6.7	1	1.3
8	自宅やその周辺	チョウやトンボなどの昆虫を捕まえたことがありますか。	48	64.0	7	9.3	3	4.0	52	69.3	9	12.0	3	4.0	0	0.0
9	自然環境	山菜採りやキノコ・木の実などを採取したことがありますか。	25	33.3	2	2.7	2	2.7	30	40.0	11	14.7	7	9.3	2	2.7
10	自然環境	海や川で貝をとったり魚を捕まえりしたことがありますか。	20	26.7	8	10.7	3	4.0	55	73.3	27	36.0	15	20.0	3	4.0
11	自然環境	湧き水や井戸水を飲んだことがありますか。	9	12.0	4	5.3	3	4.0	28	37.3	16	21.3	14	18.7	6	8.0
12	自然環境	自然を対象とした絵をいたり、写真を撮ったりしたことがありますか。	67	89.3	58	77.3	35	46.7	39	52.0	50	66.7	51	68.0	45	60.0
13	自然環境	大きな木に登ったことがありますか。	26	34.7	5	6.7	1	1.3	48	64.0	17	22.7	4	5.3	1	1.3
14	自然環境	自然の中で探検ごっこや秘密基地作りをしたことがありますか。	31	41.3	1	1.3	1	1.3	55	73.3	3	4.0	1	1.3	1	1.3
15	自然環境	野外で、虹や花や星や虫などを見て感動したことがありますか。	45	60.0	32	42.7	28	37.3	54	72.0	42	56.0	45	60.0	33	44.0
16	自然環境	野鳥を見たり、鳴く声を聞いたりしたことがありますか。	53	70.7	47	62.7	34	45.3	64	85.3	60	80.0	53	70.7	42	56.0
17	自然環境	野山で草木のにおいを感じたことがありますか。	58	77.3	38	50.7	25	33.3	59	78.7	49	65.3	45	60.0	29	38.7
18	自然環境	草や木でかぶれたことがありますか。	20	26.7	7	9.3	6	8.0	21	28.0	7	9.3	7	9.3	4	5.3
19	自然環境 (レジャー)	ハイキング（乗り物利用を含む）に出かけたことがありますか。	46	61.3	36	48.0	9	12.0	45	60.0	37	49.3	23	30.7	18	24.0
20	自然環境 (レジャー)	ロープウェイやリフトを味わうに高い山に登ったことがありますか。	19	25.3	10	13.3	5	6.7	19	25.3	14	18.7	6	8.0	2	2.7
21	自然環境 (レジャー)	キャンプをしたことがありますか。	24	32.0	9	12.0	3	4.0	28	37.3	14	18.7	14	18.7	3	4.0
22	自然環境 (レジャー)	乗馬や乳しぼりなど、動物とふれあったことがありますか。	29	38.7	11	14.7	5	6.7	53	70.7	27	36.0	11	14.7	5	6.7
23	地域社会	地元のお祭りに参加したことはありますか（露店での購買のみを除く）。	23	30.7	11	14.7	5	6.7	61	81.3	44	58.7	33	44.0	6	8.0
24	地域社会	第一次産業（農業・林業・水産業）に関する職業体験をしたことがありますか。	33	44.0	10	13.3	3	4.0	15	20.0	6	8.0	3	4.0	8	10.7
25	地域社会	ゴミ拾い活動や美化活動に参加したことはありますか。	51	68.0	38	50.7	25	33.3	29	38.7	13	17.3	9	12.0	7	9.3
26	地域社会	公園や街路樹などの緑地の管理・植樹活動に参加したことはありますか。	13	17.3	7	9.3	4	5.3	11	14.7	5	6.7	2	2.7	1	1.3
27	環境学習・意識	義務ではない自然に関する学習会や観察会に参加したことはありますか。	9	12.0	1	1.3	3	4.0	11	14.7	2	2.7	2	2.7	1	1.3
28	環境学習・意識	個人的に自然に関する観察や調査をしたことがありますか。	14	18.7	6	8.0	6	8.0	12	16.0	3	4.0	2	2.7	1	1.3
29	環境学習・意識	ある品物が同じ価格帯で環境配慮商品の方を購入したことはありますか。	未調査項目						2	2.7	6	8.0	21	28.0	18	24.0
30	環境学習・意識	ある品物が高くても環境配慮商品の方を購入したことはありますか。	未調査項目						1	1.3	3	4.0	14	18.7	6	8.0

太字は60%以上のもの。

(K大学でのアンケート調査により作成)

買活動（29,30）のように体験率が上昇する項目もある。なお、ナイフ・包丁の使用（1）は、学校教育内外ともにどの時期でも高い割合を示している。

表2は、学校教育内外・発達時期別一人当たりの自然体験項目数の度数分布と平均値を示している。平均値に対して、体験項目数の分布には多少の分散がみられる。この分散状況を検討するために、中高時の部活動や高校時の生徒会等の経験と、学校教育内外における発達時期別自然体験項目ごとの経験割合の関係を検討した（表3）。中学時の部活動については、運動部と文化部の所属では最大でも0.9ポイントの差しか生じていない。それに対し、高校時の部活動では、運動部と文化部の所属によって最大

表2 学校教育内外・発達時期別一人当たりの自然体験項目数の度数分布と平均値

一人当たりの自然体験項目数	学校教育内						学校教育外							
	小学校		中学校		高校		小学時		中学時		高校時		大学時	
	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%	n=75	%
0～4項目	4	5.3	24	32.0	50	66.7	3	4.0	4	5.3	17	22.7	43	57.3
5～9項目	5	6.7	37	49.3	22	29.3	8	10.7	34	45.3	47	62.7	29	38.7
10～14項目	30	40.0	10	13.3	2	2.7	26	34.7	21	28.0	9	12.0	3	4.0
15～19項目	30	40.0	2	2.7	0	0.0	31	41.3	12	16.0	2	2.7	0	0.0
20～24項目	6	8.0	1	1.3	0	0.0	5	6.7	3	4.0	0	0.0	0	0.0
25項目～	0	0.0	1	1.3	1	1.3	2	2.7	1	1.3	0	0.0	0	0.0
平均値	14.0項目		6.5項目		3.7項目		14.9項目		8.6項目		6.8項目		4.4項目	

(K大学でのアンケート調査により作成)

表3 中・高校時の部活動・生徒会等の所属と学校教育内外における発達時期別自然体験項目ごとの経験割合

中高時の部活動・生徒会等の所属	学校教育内			学校教育外			
	小学校	中学校	高校	小学時	中学時	高校時	大学時
中学・運動部 (n=50)	14.3	6.3	3.5	15.3	8.8	7.0	4.5
中学・文化部 (n=21)	13.8	6.1	3.4	14.4	8.2	6.7	4.5
高校・運動部 (n=36)	13.9	6.4	3.3	13.6	7.8	6.2	3.8
高校・文化部 (n=16)	13.3	7.8	4.7	15.9	10.4	8.3	9.9
高校・部活動無所属等 (n=23)	14.6	6.0	3.7	15.7	8.3	6.7	4.9
高校・生徒会等 (n=16)	15.0	7.2	3.6	15.8	9.9	7.8	3.9

(K大学でのアンケート調査により作成)

2.6 ポイントの差（大学時を除く）が生じており、対照的な傾向がみとれる。文化部所属だった学生の学校教育内外において、中高の時期に体験項目が多い。特に学校教育外において顕著であり、大学時には著しく突出している。高校時の生徒会等経験者は、学校教育外において小学生から高校生までの期間、体験項目数が平均より多い。

さらに、プログラムごとの調査結果についてである。「体験型研修（自然の分野）」履修学生と履修していない学生（「FYS」履修学生）との間の差異を検討する。「体験型研修」のプログラムごとに検討するが、先行研究でも指摘されているように、少人数授業のアンケートでは回収枚数が少なくなる点が否めない。そのため本研究では、統計学的な検定等による分析は行わない。「体験型研修（自然の分野）」に属するプログラム「みどりの鎌倉」（以下【鎌倉】と略記）、「食育わくわく体験」（同【食育】）、「ケーキ屋・パン屋になろう」（同【パン】）それぞれの授業の到達目標に対応する自然体験項目との関係を分析し、各プログラムの自然体験項目の体験人数の割合を捉える指標として「FYS」の値を参照する。表4は、各プログラムの到達目標に対応する自然体験項目のリストと、参考として用いる「FYS」の体験人数の割合を示したものである。表4は、表5から表7の分析時に適宜参照する。

表5は、【鎌倉】の到達目標に関する学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合を示したものである。回答数6割以上に注目すると、花の栽培（3）と種や実・枝・石などの遊び（6）は、小学校と小学時のみ、ハイキング（19）は小学校、小学時と中学時で高い割合を示している。五感に関する項目は、学校教育内の小学校と中学校において（16,17）、学校教育外の小学時から高校時において（17）、小学時から大学時において（15,16）割合が高く、長い期間にわたって体験を繰り返している

表4 各プログラムの到達目標と「FYS」における学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合

No.	分類	調査項目 (略記)	到達目標との対応			(参考) 「FYS」							
			【鎌倉】	【食育】	【パン】	学校教育内			学校教育外				
						小学校	中学校	高校	小学時	中学時	高校時	大学時	
1	自宅やその周辺	ナイフ・包丁の使用		○	○	88.0	92.0	76.0	68.0	72.0	76.0	48.0	
3	自宅やその周辺	花の栽培	○	○	○	96.0	40.0	8.0	52.0	36.0	16.0	8.0	
4	自宅やその周辺	米や野菜の栽培		○	○	88.0	28.0	4.0	36.0	16.0	8.0	0.0	
5	自宅やその周辺	ジャムなどの食品加工		○	○	16.0	12.0	8.0	12.0	4.0	4.0	0.0	
6	自宅やその周辺	種や実・枝・石などの遊び	○	○	○	92.0	32.0	16.0	80.0	32.0	12.0	4.0	
8	自宅やその周辺	昆虫採集		○		64.0	20.0	8.0	64.0	8.0	4.0	0.0	
9	自然環境	山菜採り	○	○		36.0	8.0	8.0	32.0	12.0	8.0	4.0	
10	自然環境	魚釣り		○		28.0	12.0	8.0	68.0	32.0	12.0	0.0	
11	自然環境	湧き水や井戸水の飲用		○		12.0	4.0	4.0	24.0	12.0	20.0	0.0	
12	自然環境	自然対象の絵画・写真撮影	○		○	88.0	76.0	56.0	64.0	68.0	68.0	56.0	
14	自然環境	探検ごっこ・秘密基地作り	○			52.0	4.0	4.0	60.0	4.0	0.0	0.0	
15	自然環境	虹など自然の感動体験	○		○	68.0	44.0	36.0	76.0	60.0	60.0	28.0	
16	自然環境	野鳥の見聞きの意識	○			80.0	72.0	48.0	84.0	80.0	56.0	40.0	
17	自然環境	草木のにおいへの意識	○		○	76.0	64.0	32.0	80.0	68.0	56.0	24.0	
19	自然環境 (レジャー)	ハイキング体験	○			52.0	52.0	16.0	48.0	44.0	32.0	12.0	
22	自然環境 (レジャー)	乗馬や乳しぼり		○		44.0	20.0	12.0	68.0	32.0	12.0	0.0	
23	地域社会	地元の祭り参加			○	24.0	20.0	16.0	72.0	56.0	40.0	4.0	
24	地域社会	第一次産業職業体験		○	○	52.0	24.0	8.0	20.0	12.0	4.0	0.0	
25	地域社会	美化活動参加	○		○	64.0	52.0	32.0	32.0	20.0	12.0	8.0	
26	地域社会	緑地の管理・植樹活動参加	○			32.0	16.0	12.0	24.0	16.0	4.0	0.0	
27	環境学習・意識	学習会や観察会参加	○	○		16.0	4.0	4.0	16.0	4.0	0.0	0.0	
28	環境学習・意識	自然観察や調査実施	○	○		20.0	12.0	8.0	20.0	4.0	4.0	4.0	
29	環境学習・意識	同価格帯環境配慮商品選択			○	未調査項目			4.0	16.0	28.0	20.0	
30	環境学習・意識	高価格帯環境配慮商品選択			○	未調査項目			4.0	12.0	24.0	4.0	

数値は、サンプル数 (n=25) に対する各項目の人数の占める割合 (%)。

(K大学でのアンケート調査により作成)

ことがわかる。自然に対し継続してアンテナが立っていることが伺える。自然対象の絵画・写真撮影 (12) は、小学校、中学校において、また、中学時から大学時で割合が高い。写真撮影は、スマートフォンを持つようになると、身近な体験となるのだろう。美化運動参加 (25) は小学校での割合が高い。これは【鎌倉】で設定している「みどりのボランティア」と通ずる活動である (ただし、今年度は延期日も含め雨天のため実施できなかった)。緑地の管理等 (26)、環境学習・意識の項目 (27, 28) は割合が高くなく、FYS と比べて劣位になる時期もある (26, 28)。FYS と比べて優位となった時期がある項目は、13 項目中 9 項目にわたり、特に五感に関する項目が多い。

表 6 は、【食育】の到達目標に関する学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合を示したものである。回答数 6 割以上に注目すると、ナイフ・包丁の使用 (1) が、学校教育内の小学校、学校教育外の小学時から大学時にかけて高い割合を示している。また、栽培に関する項目 (3, 4) と種や実・枝・石などの遊び (6) の割合も高い。食育に直接関わる項目の体験が確認できる。学校教育外では、小学時に種や実・枝・石などの遊び (6)、昆虫採集 (8)、魚釣り (10)、乗馬や乳しぼり (22) といった動植物に接する項目が高い割合を示している。FYS と比べると、学校教育内では劣位と

表5 【鎌倉】の到達目標に関する学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合

No.	分類	調査項目 (略記)	学校教育内			学校教育外			
			小学校	中学校	高校	小学時	中学時	高校時	大学時
3	自宅やその周辺	花の栽培	90.0	15.0	0.0	60.0	15.0	15.0	5.0
6	自宅やその周辺	種や実・枝・石などの遊び	100.0	35.0	5.0	90.0	20.0	5.0	5.0
9	自然環境	山菜採り	45.0	0.0	0.0	45.0	5.0	15.0	0.0
12	自然環境	自然対象の絵画・写真撮影	95.0	80.0	40.0	45.0	60.0	70.0	70.0
14	自然環境	探検ごっこ・秘密基地作り	45.0	0.0	0.0	80.0	0.0	0.0	0.0
15	自然環境	虹など自然の感動体験	65.0	45.0	40.0	70.0	60.0	70.0	60.0
16	自然環境	野鳥の見聞きの意識	90.0	75.0	55.0	90.0	85.0	85.0	75.0
17	自然環境	草木のにおいへの意識	85.0	65.0	50.0	75.0	65.0	65.0	50.0
19	自然環境(レジャー)	ハイキング体験	80.0	50.0	20.0	65.0	60.0	35.0	35.0
25	地域社会	美化活動参加	90.0	55.0	35.0	40.0	25.0	20.0	0.0
26	地域社会	緑地の管理・植樹活動参加	20.0	10.0	0.0	5.0	0.0	5.0	5.0
27	環境学習・意識	学習会や観察会参加	10.0	0.0	0.0	10.0	0.0	5.0	0.0
28	環境学習・意識	自然観察や調査実施	15.0	10.0	5.0	10.0	5.0	5.0	0.0

数値は、サンプル数(n=20)に対する各項目の人数の占める割合(%)。

太字は60%以上のもの。着色は、FYSより10ポイント以上差のあるもの。緑は【鎌倉】が上回り、青は下回る。

(K大学でのアンケート調査により作成)

表6 【食育】の到達目標に関する学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合

No.	分類	調査項目 (略記)	学校教育内			学校教育外			
			小学校	中学校	高校	小学時	中学時	高校時	大学時
1	自宅やその周辺	ナイフ・包丁の使用	60.0	55.0	45.0	65.0	80.0	70.0	60.0
3	自宅やその周辺	花の栽培	100.0	10.0	5.0	45.0	20.0	5.0	15.0
4	自宅やその周辺	米や野菜の栽培	85.0	15.0	0.0	50.0	30.0	30.0	25.0
5	自宅やその周辺	ジャムなどの食品加工	20.0	0.0	0.0	15.0	15.0	10.0	15.0
6	自宅やその周辺	種や実・枝・石などの遊び	75.0	15.0	0.0	85.0	35.0	10.0	5.0
8	自宅やその周辺	昆虫採集	35.0	5.0	5.0	65.0	15.0	5.0	0.0
9	自然環境	山菜採り	15.0	0.0	0.0	45.0	25.0	5.0	0.0
10	自然環境	魚釣り	20.0	10.0	5.0	85.0	40.0	30.0	10.0
11	自然環境	湧き水や井戸水の飲用	10.0	5.0	10.0	55.0	30.0	25.0	25.0
22	自然環境(レジャー)	乗馬や乳しぼり	25.0	5.0	0.0	65.0	25.0	5.0	10.0
24	地域社会	第一次産業職業体験	50.0	0.0	0.0	30.0	10.0	10.0	35.0
27	環境学習・意識	学習会や観察会参加	15.0	0.0	10.0	15.0	5.0	5.0	0.0
28	環境学習・意識	自然観察や調査実施	20.0	0.0	10.0	15.0	5.0	0.0	0.0

数値は、サンプル数(n=20)に対する各項目の人数の占める割合(%)。

太字は60%以上のもの。着色は、FYSより10ポイント以上差のあるもの。緑は【食育】が上回り、青は下回る。

(K大学でのアンケート調査により作成)

表7 【パン】の到達目標に関する学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合

No.	分類	調査項目 (略記)	学校教育内			学校教育外			
			小学校	中学校	高校	小学時	中学時	高校時	大学時
1	自宅やその周辺	ナイフ・包丁の使用	70.0	80.0	70.0	90.0	100.0	100.0	90.0
3	自宅やその周辺	花の栽培	100.0	10.0	10.0	40.0	10.0	20.0	0.0
4	自宅やその周辺	米や野菜の栽培	80.0	10.0	10.0	40.0	10.0	0.0	0.0
5	自宅やその周辺	ジャムなどの食品加工	10.0	0.0	0.0	50.0	40.0	20.0	30.0
6	自宅やその周辺	種や実・枝・石などの遊び	80.0	30.0	0.0	90.0	30.0	30.0	30.0
12	自然環境	自然対象の絵画・写真撮影	90.0	80.0	70.0	50.0	80.0	70.0	30.0
15	自然環境	虹など自然の感動体験	50.0	40.0	40.0	60.0	50.0	50.0	40.0
17	自然環境	草木のにおいへの意識	80.0	50.0	20.0	90.0	80.0	70.0	70.0
23	地域社会	地元の祭り参加	30.0	10.0	0.0	60.0	30.0	20.0	10.0
24	地域社会	第一次産業職業体験	40.0	10.0	10.0	10.0	10.0	0.0	10.0
25	地域社会	美化活動参加	60.0	50.0	40.0	20.0	0.0	0.0	30.0
29	環境学習・意識	同価格帯環境配慮商品選択	未調査項目			0.0	0.0	20.0	30.0
30	環境学習・意識	高価格帯環境配慮商品選択	未調査項目			0.0	0.0	10.0	20.0

数値は、サンプル数 (n=10) に対する各項目の人数の占める割合 (%)。

太字は60%以上のもの。着色は、FYSより10ポイント以上差のあるもの。緑は【パン】が上回り、青は下回る。

(K大学でのアンケート調査により作成)

なる時期のある項目が13項目中10項目にわたる。対照的に、学校教育外では優位となる時期のある項目が13項目中8項目(劣位となる時期を持つ項目は2項目)である。米や野菜の栽培やジャムなどの食品加工(4,5)、山菜採りや魚釣り(9,10)、湧き水や井戸水の飲用(11)、乗馬や乳しぼり(22)といった食育に直接関わる項目が優位となっている。また、第一次産業職業体験(24)は、小学時にはFYSの方が優位だが、大学時には【食育】が優位となっている。

表7は、【パン】の到達目標に関する学校教育内外・発達時期別自然体験項目ごとの体験人数の割合を示したものである。【パン】は回答数が少ないものの2点指摘しておきたい。ひとつは、回答数6割以上に注目すると、学校教育外の小学時から大学時まで、ナイフ・包丁の使用(1)、草木のにおいへの意識(17)の割合が高い。もうひとつは、FYSに比べ劣位となっている項目が学外での実習である【鎌倉】、【食育】に対し多い傾向にある。室内での実習となる【パン】に特有の傾向が浮かび上がった。

3つのプログラムを検討すると、【鎌倉】と【食育】において学校教育外の自然体験活動に優位性があることが確認できた。学校教育内については、「FYS」が優位だった項目も少なくないが、【鎌倉】と【食育】の履修者は、学校からの自然活動機会を受容するに限らず、学校教育外での自然活動に主体的に関わってきた可能性がある。

表8は、社会性に関する項目について得られた4段階評価の回答に対し、あてはまる(4点)、ややあてはまる(3点)、ややあてはまらない(2点)、あてはまらない(1点)に得点化し、平均を求めたものである。科目・プログラム別にみると、【鎌倉】において行動の積極性(1)と環境への意識(22)が他より高い値となった。表5と照らし合わせると、自然体験への積極性が、実際の体験の豊富さと自らの意識の両側面から読みとれる。全体的にみると、失敗に対する不安(3)、達成動機(6,8)、努力主義(11,12)、他者協力(15,16,18)において数値が高い傾向にある。また、行動の積極性(1,2)、能力

表8 各科目・プログラム別社会性に関する項目の得点値

No.	調査項目	【鎌倉】 n=20	【食育】 n=19	【パン】 n=10	FYS n=25	全科目 n=74
1	何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである。	2.5	2.1	2.4	2.1	2.2
2	どんなことでも積極的にこなすほうである。	2.6	2.8	2.1	2.7	2.6
3	何かをするとき、うまくいかないのではないかと不安になることが多い。	3.1	3.1	3.0	3.4	3.2
4	友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	2.6	2.6	2.6	2.9	2.7
5	世の中に貢献できる力があると思う。	2.3	2.8	2.2	2.8	2.6
6	自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみたい。	3.3	3.4	3.2	3.4	3.4
7	他の人にはやれないようなことをやり遂げたい。	3.1	3.3	2.4	3.3	3.1
8	新しいことや違うことをいろいろしてみたい。	3.4	3.4	3.3	3.2	3.3
9	自分の理想に向かって絶えず向上していきたい。	3.2	3.5	2.7	3.3	3.2
10	自分の主張は通すほうである。	2.9	2.8	2.4	2.7	2.8
11	何でも手がけたことには最善を尽くしたい。	3.2	3.6	3.1	3.4	3.4
12	人の一生は案外、偶然的出来事で決まるものだと思う。	3.5	3.5	3.5	3.4	3.5
13	人とうまく付き合っているほうである。	2.9	2.7	2.3	2.9	2.8
14	現在の自分に満足している。	2.5	2.3	2.4	2.4	2.4
15	仲間（知っている人たち）の誰かが参加するなら、自分も参加することが多い。	3.2	3.1	2.9	3.5	3.2
16	仲間に「助けられる」ことがたびたびあったと感じる。	3.7	3.5	3.5	3.5	3.5
17	仲間を「助けた」ことがたびたびあったと感じる。	2.9	3.1	2.4	3.1	2.9
18	何かの目的のためなら、その場で出会った人とも協力して行動できる。	3.5	3.5	2.7	3.5	3.4
19	中学生以上になってから、小学生以下の子どもと遊んであげたことがある。	3.1	3.3	2.7	3.2	3.1
20	バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席を譲ったことがある。	3.2	2.8	3.1	3.2	3.1
21	自然を守るために、少しの不便は我慢できる。	3.0	2.9	3.0	3.0	3.0
22	町や自然のためになる行動をしたい。	3.3	2.9	2.3	3.0	2.9

あてはまる（4点）ややあてはまる（3点）ややあてはまらない（2点）あてはまらない（1点）を得点化し、平均を求めた。

各科目・プログラムの着色は、全科目より0.3以上差があり、高いものが赤、低いものが青。全科目の着色は、3.2以上のもの。

（K大学でのアンケート調査により作成）

の社会的位置付け（4,5）、自信と自己受容（14）の数値がそれほど高くない。これらは、事例としたK大学生の特徴と考えられる。

(3) 考察

アンケート結果による各プログラム履修生の傾向として、【鎌倉】では五感に関する項目において、小学時にとどまらず中学時以降でも体験をしている人が多くみられた。この項目は【鎌倉】の授業内容の里山散策と直接関わる。【食育】では、栽培や採集（山菜や魚釣り）の項目において、FYSに対する優位が確認できた。この項目は【食育】のうち食材に関わる項目である。2つのプログラムの履修者は、大学入学前に、それぞれのプログラムの授業内容に直接関わる自然体験を経験済みであることが多いと考えられる。ここではこのような履修者を、自分の興味関心に対し、さらに体験回数を増やし、その体験を深化させたいという集団群と捉えてみたい。

他方、自然体験学習に参加する機会は必ずしも平等ではなく（太田, 2025）、自然体験が意図せずに行えるものからわざわざ意図的にされるものへと変化してきた（青山, 2025）ならば、教員側が自然体験プログラムを用意するのはもちろんのこと、さまざまな層の学生に関心を持ってもらい、参加を促す

きっかけ作りも必要となろう。では、教員から学生に向けてどのようなアプローチが可能であろうか。本稿では表8で得られた成果をもとに考察を行う。

表8で評価が高かった項目によって、K大学生へのアプローチを考えてみる。K大学生は、「めぐりあわせを受け入れたり(12)」、「新しいことをしてみたい(8)」という。ならば、学生に対して自然体験プログラムの存在をうまくアピールできれば、さまざまな層の学生を取り込むことが可能であろう。また、「仲間の誰かが参加するなら、自分も参加することが多い(15)」ならば、学生が別の学生を誘うという、いわゆる芋づる式によって体験の機会を作り出すことも一案であろう。そして、「自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやり(6)」、「なんでも手がけたことには最善を尽くしたい(11)」という意欲に応えられるよう、プログラムの工夫は不可欠である。

「何かの目的のためなら、その場で出会った人とも協力して行動できる(18)」という能力を有するならば、それを授業内容に組み込むのも一案となろう。つまり、仲間と一緒に一つのことを成し遂げることを体験の一つとし、それを到達目標に関連付けたり、シラバスに掲載したりすることで、自然体験にあまり関心のない学生の掘り出しにつながる可能性がある。そのためには、プログラムの効果を検証し、シラバス等で「見える化」を図ることが有益であろう。

5. おわりに

本稿の目的は、大学生の青少年期における自然体験活動への参加傾向の実態と課題を明示することである。その結果、次の傾向が明らかになった。

第一に、K大学「体験型研修【自然の分野】」履修生のこれまでの自然体験は、学校教育内外ともに小学生での体験率が高い。また、高校時の部活動の所属による差異が確認され、文化部所属だった学生は中高時に体験項目が多い傾向にある。

第二に、プログラムごとにこれまでの自然体験の項目を見ると、「みどりの鎌倉」では、五感に関する項目の体験の割合が高い。「食育わくわく体験」では、学校教育外において食育に直接関わる項目の体験の割合が高い。「ケーキ屋・パン屋になろう」では、学外で活動する先の2つのプログラムほど、顕著な傾向は示されなかった。

第三に、社会性に関する項目の調査から、調査対象者全体において、「失敗に対する不安」があるものの、「達成動機」、「努力主義」、「他者協力」について積極性が読み取れた。

以上から、「体験型研修(自然の分野)」のうち、「みどりの鎌倉」と「食育わくわく体験」の履修者からは、すでに体験してきたがさらに体験回数を増やす行動をとっている学生像が浮かび上がった。また、K大学生に特徴的な社会性から「体験型研修(自然の分野)」のプログラム作成上のアプローチ方法を検討することができた。

最後に、本稿の研究の限界と今後の研究課題を提示しておく。まず、アンケートの量的不足が本稿の限界として指摘できる。これは他大学の同様のプログラムの報告でも指摘されており、継続的な調査を実施することで解消を試みたい。次に、アンケートの調査項目が定量的なものであり、定性的な調査を実施していない点も改善の余地がある。ただし、授業の担当教員と履修学生という関係性において、どこまで定性的な調査の客観性が担保できるか、その方法論から検討していく必要がある。

ところで、「ネイチャーポジティブ」の国家戦略は、2030年までに自然を守り、自然を活かす取組が行われ、人と生きものが共に暮らす地域社会を描いている。K大学の立地する横浜市では、「2027年国際園芸博覧会(通称:GREEN×EXPO 2027)」が実施予定(2027年3月19日~9月26日)である。「幸せを創る明日の風景(Scenery of the Future for Happiness)」をテーマとして、「国際的な園芸文化の普及」「花と緑があふれ、農が身近にある豊かな暮らしの実現」「多様な主体の参画等により幸福感が

深まる社会の創造」を目的とする。また、「自然との調和 (Co-adaptation)」「緑や農による共存 (co-existence)」「新産業の創出 (Co-creation)」「連携による解決 (Co-operation)」を主眼とする。今後、大学生の自然体験プログラムの効果検証を進めることによって、大学生の主体的行動に繋がり得る実学教育を構築したい。同時に、大学と地域社会との連携により、大学生と自然との調和・共存に貢献したい。

付記

本稿は、「『実学教育』の実質化による 教育的価値創造の原理の構築：具体と抽象とのインタラクティブアプローチ」の「文理横断型『実学教育』の授業モデル開発」「『実学教育』で培う能力構造の解明と自己評価」の研究の一環である。「体験型研修（自然の分野）」のうち、「みどりの鎌倉」において共同で授業運営にあたった本学建築学部落合努先生には大変お世話になった。記してお礼申し上げる。

引用文献

- 青山鉄兵 (2025)「青少年の成長を支える自然体験—これからの体験活動を構想していくために」関礼子・井上真理子・太田和彦編著『〈驚き (ワンダー)〉を呼び込む自然体験学習—環境を学ぶ心身をつくる第一歩』152-164. 昭和堂.
- コメニュウズ (1962)『大教授学』鈴木秀勇訳, 明治図書出版.
- 林寿則・岡田聖一 (2020)「自然体験の動向と植樹活動の教育的効果」『生態環境研究』26-1, 17-36.
- 環境省 (2003)「生物多様性国家戦略 2023-2030～ネイチャーポジティブ実現に向けたロードマップ～」<https://www.env.go.jp/content/000124381.pdf> (2025. 11. 1 アクセス).
- 環境省 自然環境局 HP. <https://www.env.go.jp/kobunsho/organization/department/nature.html> (2025. 11. 1 アクセス)
- 神奈川大学「共通教養科目 体験型研修」HP. <https://www.kanagawa-u.ac.jp/education/liberalarts/hands-on-learning/> (2025. 11. 1 アクセス)
- 川畑和也・福満博隆 (2019)「共通教育科目として『自然体験活動』の効果に関する一考察—自由記述レポートによる質的検討—」『鹿児島大学総合教育機構紀要』2, 67-77.
- 奇正二彦・嘉瀬貴祥・濁川孝志 (2019)「自然体験の多寡を測定する尺度の開発」『コミュニティ福祉学研究科紀要 (立教大学)』17, 25-42.
- コンサベーション・インターナショナル (CI)「社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ」<https://www.conservation.org/japan/initiatives/biodiversity/satoyamainitiative> (2025. 11. 1 アクセス)
- 国立青少年教育振興機構 (2024)『青少年の体験活動等に関する意識調査 (令和 4 年度調査) 報告書』.
- 松井幸太 (2020)「自然体験活動を通じたエンカウンターグループの実践—参加者のふりかえりと自己効力感および自己成長性からの検討—」『関西国際大学研究紀要』21, 69-80.
- 松重摩耶・上月康則・山中亮一 (2017)「大学生を対象とした干潟での自然体験学習に関する考察—アクティブラーニングの視点から—」『沿岸域学会誌』30-1, 53-63.
- 文部科学省 (2013)「今後の青少年の体験活動の推進について」(中央教育審議会・答申) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1330230.htm (2025. 11. 1 アクセス)
- 中川理絵・齊藤ゆか (2025)「高等教育における食育体験プログラムの開発—実学教育からのアプローチ—」『人文学研究所報』73, 75-85.
- 日本野外教育学会 (2022)「野外教育を通じて子供の育ちを支える：すべての子供が豊かな自然体験を享受できる社会を目指して (政策提言)」.
- 二宮咲子・今井葉子 (2018)「自然体験教育プログラムのアクティブ・ラーニング教育効果の検証」『人間環境学会紀要』30, 47-61.
- 太田和彦 (2025)「『アウトドア・スタディーズ』が拓く視点—多様性と幸福, 持続可能性」関礼子・井上真理子・太田和彦編著『〈驚き (ワンダー)〉を呼び込む自然体験学習—環境を学ぶ心身をつくる第一歩』57-71. 昭和堂.
- 高橋多美子・高橋敏之 (2007)「幼少期における自然体験の重要性の再検討と教育的意義」『理科教育学研究』48-1, 51-61.
- 常木静河・田口正和・菅沼教生・高井吾朗 (2022)「教員養成課程の学生を対象とした大学構内の竹林を使った

自然体験活動の実践』『教養と教育（愛知教育大学）』22, 22-29.

上野裕介・安藤耕介・長谷川啓一（2021）「市民アンケートからみた親の自然体験の消失が子や孫の自然体験率に及ぼす影響」『ランドスケープ研究』84-5, 565-570.

渡部芳栄（2018）「子どもの自然・社会体験の変容と現状に関する分析」『高等教育推進センター紀要リベラル・アーツ（岩手県立大学）』13, 23-38.

Participation Trends in Nature Experience Activities Among College-Aged Youth (First Report)

YAMAGUCHI Taro, NAKAGAWA Rie, SAITO Yuka

Abstract

This study clarifies participation trends and challenges in nature experience activities among college-aged university students through surveys and analyses targeting participants in experiential nature programs.

The study's key findings are as follows: (1) Participation in nature experiences, regardless of whether within or outside the school system, peaks during elementary school and tends to decrease during junior high and high school. (2) A high proportion of activity content involved familiar activities, such as play, sensory experiences, and hiking. (3) Cultivation and beautification activities were common within the school system, while outside the school system, participation in nature play and local events was prevalent. (4) Students who belonged to cultural clubs in high school tended to have more non-school-based nature experiences during their junior high and high school years. (5) Outdoor-focused programs corresponded to past nature experience items; for example, programs about Kamakura emphasized sensory experiences, whereas food-education programs focused on food- and agriculture-related experiences. (6) Conversely, participants in primarily indoor programs had slightly fewer experiences of nature than those in the other two program types. (7) The social skills survey revealed the existence of "anxiety about failure" but also confirmed that "achievement motivation," "effort orientation," and "cooperation with others" were positive aspects. These characteristics suggest possible approaches for program design.

Keywords: university student, youth, nature experience activities, participation